

イルデフォンソ・ファルコネス著、木村裕美訳「海のカテドラル 上」

RHブックス・プラス、武田ランダムハウスジャパン 2010年5月10日刊を読む

ピア・フォラ ピア・フォラ
「非常召集! 武器をとれ!」

「ほら、ぼうやたち、行っておいで」と女たちが急ぎたてた。「あたしたちのだんなを、よろしく頼むわね」

「父さんによく言っというてよ!」アルナウは、まだ三、四メートルやっと歩いたばかりのアストラニャにむかって叫んだ。

のろのろ歩いていく婢女から、アルナウはなかなか目を離そうとしない。それにジュアネットは気づいて、友人の迷いを察知した。

「あの女の人たちが言ったの、きいたでしょ?」とジュアネットは言った。「ぼくたちバルセロナの義勇兵を世話してあげなくちゃ。きみのお父さんだって、きっとわかってくれるよ」

アルナウはうなずいた。はじめはゆっくり、それから大きく首をふる。もちろん、わかってくれるさ! 父さんだってバルセロナの“市民”になるのに、ずっとがんばってきたじゃないか。

もういちど広場のほうをむくと、捕吏の掲げるふたつの旗にくわえて、三つめの旗があがっていた。交易商たちだ。旗を掲げもつ者は戦闘の装いこそしていないが、弩弓を背負い、腰に剣を帯びている。すぐあとに、またべつの旗が到着した。こんどは貴金属商。広場は色彩豊かな旗ですこしずつ埋まっていく。あらゆる表徴や模様が見てとれた。毛皮商の旗あり、外科医と理髪師の旗あり、大工に、鍋釜製造職人に、陶工に……。

職種ごと、それぞれの旗のもとに男たちが続々と集まってくる。バルセロナの自由民だ。法の定めにしたがって、誰もが武器をたずさえている。弩弓、矢の入った^{えびら}籠、剣をもつ者、長槍をもつ者。二時間もしないうちに、バルセロナの市民軍は都市の特権を守るべく、出陣の態勢をととのえた。

これがなんの騒ぎなのか、そのうちアルナウにも理解できた。ジュアネットがやっと説明してくれたのだ。

「バルセロナは、必要なときに守りにつくだけじゃない」と友人は言う。「市と敵対しようとするやつらを攻撃することもあるんだ」子どもは兵や旗を指さして、夢中でまくしたてる。おびたしい数の人が集まってきたもので、自分まで得意の絶頂なのだ。「すごいんだぜ! そのうちわかるよ。うまくいけば、ぼくたちも何日か外ですごすことになるかもしれないよ。誰かがバルセロナの市民に悪さをしたり、都市の特権をふみにじったりしたら、それを訴えることができるんだって……うーん、誰に訴えるのかよく知らないけど、王室代官か、百人議会かな。とにかく、その訴えが嘘じゃないってお上^{かみ}が判断したら、聖ジョルディの旗があがって、市民義勇軍の召集がかかるんだよ。ほら、あそこの旗、見えるでしょ? 広場のまんなかで、いちばん高く立ってるやつ。そうすると教会の鐘が鳴って、みんな大声で“ピア・フォラー”って叫びながら家からとびだしてくる。これでバルセロナじゅうに伝わるんだよ。同業者信心会の長たちも旗をだして、職人や商人が旗のまわりに集まってきてさ。そうやって市民義勇軍が戦^{いくさ}にでかけるんだ」

アルナウは目を皿にして光景をながめながら、ジュアネットのあとについて、小麦広場にひしめく

群衆をくぐりぬけた。

「でも、ぼくたち、なにすればいいの？ 危ないこと？」広場に押しよせる男たちの派手な武装ぶりを見て、アルナウがきいた。

「ふつうは、そんなに危なくないよ」ジュアネットがにこっとした。「王室代官が召集をかけるっていても、“バルセロナ”の名のもとに呼びかけるし、それが王さまからの呼びかけにもなるって思えばいいんだよ。市民は王の軍隊と戦っちゃいけないって、きまってるしね。“敵”が誰かにもよるけど、バルセロナの市民義勇軍が押しよせてくるのを見ると、どこの領主でも、ふつうは降参して言うなりになっちゃうんだ」

「じゃあ、合戦にはならないの？」

「市民の代表がどうきめるか、あと、領主の態度にもよるのかな。このあいだなんて、領主の城がめちゃめちゃになったよ。あのときは合戦だったね。死んだ人もいたし、攻撃があつて…」

P184 ~ 186

[コメント]

中世のスペイン・バルセロナは自由の象徴の都。バルセロナの自由民の義務は、自らの手で自由を守ること。自由を守るために立ち上がること。今、日本人に求められることは何か。誰のどのような自由を守るために立ち上がるべきなのか。目をしっかりと見開き、成すべきことを成し遂げたい。